

## マスターズを彩るレジェンドたち(28)

風薫る阜月。鯉のぼりが空中で泳ぎ、子どもたちの元気な声が耳に心地良い。マスターズの皆さんも健康な身体で走り、跳び、投げる、のシーズンがやってきた。各地から「記録のたより」が聞ける季節でもある。今月もユニークなマスターズの顔をお届けしたい。M85クラスの藤原耕作さん(86歳・岩手)と、W55クラスの大朝尚子さん(55歳・東京)のお二人だ。藤原さんは短距離、大朝さんはハードルに取り組んでいる。

### 藤原耕作さん(86歳・岩手) 粋な人生経歴をたどって

岩手県花巻市に住む藤原耕作さんは多彩な人生の道のりを歩んできた。花巻南高を卒業すると、静岡の航空自衛隊へ。同隊では地上で通信士として勤務していたが、家庭の事情で郷里へ戻ることになり、3年で除隊。

自家では農作業に精を出した後、花巻野外活動センターで10年間、活動した。が、センターでの利用者が小学生中心となって、指導するには「若い人が良い」ということで退職した。この後、48歳で「フジワラ印刷」を設立。現在も会長職だ。

この間、55歳で「誘われるままマ

スターズ陸上」へ。「高校時代は柔道とか弓道をしていただけ、ケガしたりして……」。陸上もリレーの助っ人として走ったり、高3のときには「県の国体予選で100mに出場したことも」と話す。

マスターズへ入会した当時は駅伝への取り組みを勧められ、チーム・リーダーとして自らも長い距離を走るようになった。最初は5kmまでを目標に、次に、15kmまで、それ以上に距離を伸ばした。長い距離に自信が持てるようになると、全国のマラソン大会に出たり、九州の大会まで足を伸ばしたり。

だが、もともとは短い距離に向いていたことから、短距離に方向転換へ。岩手県内のマスターズ大会などに参加していた藤原さんは、次第に力を付けて、2003年の第20回記念東北マスターズ選手権のM65クラスの200mで28秒83、400mに1分06秒65と2種目に優勝した。65歳だった。

この年の秋、石川県で行われた第24回全日本マスターズ選手権では、同じM65クラスの200mに28秒48(+2.1)、400mは1分07秒77で入賞を果たした。同年6月での県マスターズ選手権ではM65の100m13秒86、200m29秒41、400m1分06秒58と3種目を制した。

70代になると、14年に北上市であった第35回全日本マスターズ選手権のM75クラスの60m9秒94で7位、100m15秒13、200m33秒18といずれも7位に入賞した。東北や岩手の各ブロック大会でも活躍した。

さらに18年に80歳になった年の第

39回全日本マスターズ選手権では、M80クラスの100mで16秒33の6位、400mが1分28秒51の4位だったが、200mでは34秒62と3位になり、表彰台に上がった。クラス別の日本10傑でもM80・60m9秒79で8位と、200mでは34秒62の7位に。100m16秒33、400m1分28秒51で10位と名前が全国記録集に記載された。60mを除くと全日本マスターズでの結果ばかりだった。

近年では81歳の19年、夏場に秋田県大館市での第36回東北マスターズ選手権で再び3種目に勝った。60m10秒33、100m16秒92、200m37秒11が東北No.1になったタイムだ。

19年の第40回記念国際・全日本マスターズ選手権ではM80クラスの60mで10秒31の4位、100mは16秒81で7位入賞だった。

この藤原さん、23年5月に脳貧血で意識不明となり、約半年の間、入院生活を余儀なくされた。脳貧血で倒れたときは全くの半身不随状態。これだけではない。6、7年前にはスキー場でマットに引っ掛かって転び、腰椎狭窄症になって手術を。

まだある。22年には腎臓にがんが見つかったり。がんはさまざまな治療法のうち凍結療法がいいとか。藤原さんは冬場に地元のスキー場でレンタルショップを開いている。奥さんの管子さん(80歳)と二人の息子さんはスキー選手として各大会で活躍。藤原さん夫婦は県内初の夫婦公認スキー指導員になり、同じくご子息たちも。

管子さんは夫唱婦随でマスターズ陸



ご夫婦でスポーツを満喫している藤原耕作さんと管子さん。写真提供/岩手マスターズ陸上競技連盟



都内の小学校で陸上競技の指導にあたる大朝さん。写真提供 / 江東区立第五大島小学校



大朝さんは94年の日本選手権女子100mHのチャンピオンでもある

上の投てきを楽しみ、夫婦で海外の大会へも出掛け、絆を深めている。花巻温泉で歌謡ショーをやるほど歌も上手な藤原さん。今後の目標は「90歳で60mのスタートラインに立つこと」と言った後「1日に10回大笑いすること」と言い、大笑いした。

### 大朝尚子さん(55歳・東京) 昔取ったきねづかのハードラー

東京都内の小学校で小学生を対象にハードルの指導をしている大朝尚子さん。全国あちこちの小学校に足を運んで20年になる。

体育の授業としてハードル指導をしているご本人は「結構楽しいですよ。児童と競走するときもあるし、刺激をもらっています」と話す。時には「教えている子どもたちが、大会で良い成績を挙げてくれるだろうか」と心配することも。そのたびに「どう教えたら良い成績を挙げられるのか。よ～し、私も頑張って良い指導をしないと」と思ったり。

その大朝さん自身のハードル経験は？ といえば、大朝さんの旧姓は小林。出身の静岡県で女子陸上の名門だった西遠女高に学び、1986年のインターハイ、第39回山口大会の100mHに14秒39で2位になった、と説明すれば「ああ、あの」と思い出す人もいるだろう。

ちなみに1位は城島直美さん(埼玉

栄高・埼玉)で14秒00だった。城島さんの現姓は橋岡。今や男子走幅跳の第一人者でパリ五輪での活躍が期待される橋岡優輝さん(現・富士通)の母親だ。

それはともかく、日体大に進んだ大朝さんは、90年のインカレで向かい風2mを突いて優勝。タイムは14秒28だった。卒業後は森永製菓(大阪)に入社、実業団で存在感を示した。

94年に広島であった第12回アジア大会には日本代表として出場、100mHを13秒65と日本人では一番良い6位でフィニッシュした。同レースで1位になったカザフスタンの選手は、ドーピングで失格になったが――。

大朝さんが高3での山口インターハイで活躍したことは紹介したが、それ以前に触れると、高1のインターハイは準決勝止まり、高2の石川大会は14秒59の6位に入賞。中3からハードルに取り組んだが、この年の全日中は準決勝止まりだった。だが、同年のジュニアオリンピックでは6位に入賞している。

日体大を出た後、森永製菓に入社し、社会人として活躍を続け、アジア大会だけでなく、97年に福岡であった第12回アジア選手権では7位で13秒66と入賞した。

また、世界室内選手権の60mHに出場したことも。97年にパリで開かれた大会だ。このレースでは予選3組

で8秒35の5位となり、決勝進出とはならなかった。日本国内ではインカレでタイトルを取った後、96年に全日本実業団対抗で13秒44、広島国体の成年で13秒51と、いずれも制した。同国体はライバルだった金沢イボンスに勝ったレースだった。

思い出に残るのは94年の第78回日本選手権を13秒60で優勝したこと。反対に残念だったのは、96年の第80回同選手権で金沢イボンスが13秒08の日本新を記録し、自身が13秒17の自己ベスト(日本歴代2位)で2位になったとき。

「この年のアトランタ五輪の参加標準記録が13秒14で、100分の3秒及ばなかったんです」

国内外で活躍し、室内60mHと100mHの元日本記録保持者である大朝さんが、マスターズ陸上で再び“復帰”したのが40歳のとき。40代以上のマスターズの80mHでクラス別の記録を刻んできた。

W40の11秒77を皮切りに、W45で11秒94、W50は12秒97の後、昨年の埼玉マスターズ選手権で12秒88と、W55の旧記録13秒70を更新。一気に12秒台へと向上させた。

大朝さんは「私より年配の方がマスターズ陸上に打ち込んでる姿に感動を覚えます。私も意欲を持って、技術を吸収して、新たに挑戦していきたい」と話した。